おかえりなさい、はじめまして

ようこそ大山忠作美術館へ
大山忠作長女、大山忠作美術館の
企画展プロデュースアドバイザー、大山采子です
作品の見どころや父の思い出話とともに
「大山忠作襖絵展」をご案内いたします

開館15周年記念特別企画展　大山忠作襖絵展　成田山新勝寺所蔵襖絵「日月春秋」

会期　2024年10月1日—11月17日

大山忠作 美術館

《日》七面　成田山新勝寺光輪閣「日輪の間」より
画想の基盤は感動的印象「マニラ湾の夕照　空も海も真紅に染まり、巨大な太陽がぐらぐらとゆらぎながら西の海に沈んでゆく」1981年『現代日本画家素描集⑰』より抜粋

宗祖弘法大師入定1150年御遠忌の記念事業の一環として、1981年(昭和56)
成田山新勝寺光輪閣に襖絵《日月春秋》が奉納されました

日月

父の思い出

絵描きという仕事は、「行ってきます」といって朝出かけていく仕事ではない。物心ついた時から父は一日中家にいて、画室で絵を描いていた。それが大山家の当り前の景色だった。しかし、この襖絵の制作品は、作品の大きさ由とても画室に入りきらず、父は空いている倉庫を借りて、毎朝そこに出かけていった。お弁当を持って玄関を出ていく父。夕方になると帰って来る父が、とても珍しく、新鮮に思えた。制作中、家族のものは一度もその倉庫に行ったことはない。だから、どのようにしてこれを描いていたのか、その姿は分からない。でもそれは、家の画室に居ても同じことではある。

テーマは「対比」

「対比」こそが、この大作のテーマであり、父の計算だったと思います。まず「日と月」の対比。「春と秋」の対比。そして「日月」の極限まで描かない、削ぎ落とした表現。「春秋」の細部まで丁寧に描き込んだ緻密な表現。特に「春」は、桜の花はタッチで表現せず、花びらを一枚一枚描いたところに、父の挑戦と矜持(きょうじ)が感じられます。「描き込むもの」と「描かないもの」という対比こそ、父が意図したところだと思います。一人の画家がこれだけタッチの異なるものを描く試みを意図したということがポイントであり、みどころです。

《月》七面　成田山新勝寺光輪閣「月輪の間」より
「月で最も強く印象に残っているのは、デカン高原の満月である。旅には旅でしか得られぬ諸々の感動が常に伴うものである。」1981年『現代日本画家素描集⑰』より抜粋

「日」　歳を重ねてみると「日」という作品は大変な傑作だということが分かってきました。あの大きな画面で、あらゆる表現を削ぎ落とし、形といえるものは子どもでも描ける丸だけです。描かない、というのは物凄く勇気のいる事なんです。あの朝焼けの太陽の前に何十畳もの畳があり、その空間があってこそ、この絵が完成する。父はその空間を認識し描いていたと思うと、二重三重に父の考え・想い・試みが理解できた気がしました。若い時には「単純で物足りないなぁ。もっと描けばいいのに」と感じたのですが、その描かない勇気とか潔さが理解出来ると、「あ、これはやっぱりすごい絵だな」と思います。

《滝桜》（春） 六面　成田山新勝寺光輪閣「日輪の間」より
「私の郷里福島に三春という城下町があり、静かなたたずまいを見せている。この地の滝桜は、樹齢千年を誇る名木」 1981年『現代日本画家素描集⑰』より抜粋

おかえりなさい、はじめまして

キャッチコピーについて
「おかえりなさい、はじめまして」

おかえりなさい
成田山へ奉納以来、はじめて故郷の二本松へ作品が里帰りしました

はじめまして
はじめて成田山の外へ作品が出て、私たちが初めて目にするという意味を込めました

父のふるさと二本松 ---------- 私の第二のふるさと二本松

とにかく無口な父だった。二本松について饒舌（じょうぜつ）に語っている姿など見たことがない。呑んだ時に、ポツリと話題に上がるくらいだった。子どもたちが夏休みだからといって、「じゃあ田舎に帰ろう」なんて家族サービスをするような父ではなかった。365日、大好きな自分の画室に居たい人でした。母が亡くなって、私が父の仕事のサポートをするようになってから、父と同行して二本松に来る機会が出来た。郡山からバイパスを通ってくると、ほどなく左側に安達太良山が見えてくる。身を乗り出し、その山をじーっと見つめる父に、私は声をかけることが出来なかった。「父にとって故郷って特別なものなんだ」と、しゃべらないからこそ伝わってくるものがありました。二本松市に作品を寄贈し、美術館をつくることになってから、二本松に来ることが俄然増えて、二本松との御縁が急速に深まっていった。二本松の人達が、父をすごく大事にしてくれているということがとても伝わってくる。これほど郷里に愛されて、誇りに思っていただいているというのは、父にとって、遺族にとってもとても有難いことだと思っています。そして今、私が二本松に来ると皆さんが「おかえりなさい」と言ってくださる。私にも故郷ができたんだなと思っています。

春秋

《楓》（秋） 八面　成田山新勝寺光輪閣「月輪の間」より
「中禅寺湖畔に続く楓の巨木が、燃えるような朱色を湖面に映していた。直接の取材地は郷里福島の高湯であるが、色彩はそれぞれに思い出深い時の印象が強いようである。」 1981年『現代日本画家素描集⑰』より抜粋